厚木市史たより　第20号

平成31年3月20日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

厚木市域の平安・鎌倉の武士
～毛利荘と毛利・大友氏～

國學院大學栃木短期大学　菱沼一憲

はじめに

戦国大名の毛利氏・大友氏は、ともに毛利荘を故地とする。同荘については知るすべは少なく、よく分からないというのが実情ではあるが、もっとも詳細な『厚木市史中世通史編』（一九九九年）の説明から紹介してみよう。地図（図1）に示したように、荘の範囲は広大で、市域を含む愛甲郡の大部分を占めたことがみてとれる。その成立の経緯は明らかではないが、荘内に基盤を置く荻野氏・愛甲氏・藤姓毛利氏・近藤氏などの在地領主、武家棟梁家である河内源氏、そして奈良の春日社と同社を氏神とする摂関藤原家といった、在地勢力・武家・中央権力の連携により、大規模な荘園が創出されたものと考えられる。

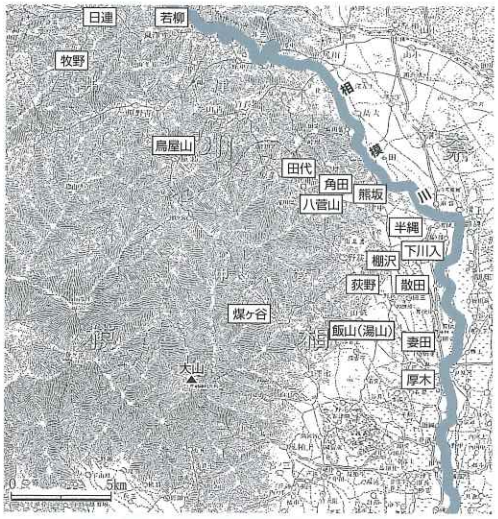

図1 毛利荘内郷名比定図（『厚木市史』中世通史編）

鎌倉幕府を開いた源頼朝の右腕大江広元が毛利荘を得て、その四男季光が毛利を称した。中国地方の戦国大名毛利氏となるのは、この子孫である。毛利氏の中興の祖といえるのが、三本の矢で有名な元就であり、もともとは安芸国吉田荘を基盤とする国人領主で、山陰の尼子氏や周防の大内氏などに属していたが、天文二十四年（一五五五）十月、大内氏を後継した陶氏を厳島合戦で退け、大内氏の領国を接収し中国地方最大の大名となる。その孫輝元は豊臣政権下で五大老に列し、関ヶ原の合戦の敗北により領国は大きく減じるが、長州藩として幕末に至る。

また戦国時代、九州北部を領した大友氏も毛利荘内の古庄郷を故地とする。同氏は相模国足柄上郡大友郷を名字の地とし、大友能直が源頼朝の側近中原親能の養子となって九州の所領を相続し、豊後国などの守護に任じられ、激動の南北朝内乱を乗り越えて九州北部を勢力下においてゆく。大友氏は二〇代義鎮（宗麟）の時に全盛期を迎え、北部九州から四国の一部にかけて一大版図をつくりあげる。しかし北上してきた島津氏に圧迫され、豊臣秀吉に助けを求めて従属するところとなる。その子義統は朝鮮出兵の際の失策で、秀吉の叱責をうけて減封され、やがて改易にいたる。大友氏の祖能直の父能成は、古庄と称し、また能直も若いころには古庄を称している。この古庄は毛利荘内の古沢に比定されている。

このように市域からは毛利・大友という、高名な戦国大名を輩出しているが、おそらくそれは偶然ではなく、なにかしら理由があるのだろう。平安末期から鎌倉期の毛利・大友氏の動向をさぐるなかで考えてみよう。

1　毛利氏

（1）源姓毛利氏

毛利氏といえば、まずは戦国大名となる大江姓の毛利氏であろう。しかし大江姓毛利氏より以前、清和源氏の毛利氏（源姓毛利氏）、藤原姓の毛利氏（藤姓毛利氏）がおり、やや複雑な状況にある。そこで、それぞれ登場する時代順に説明し整理してみよう。

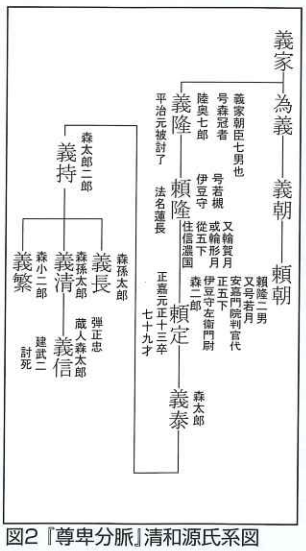

図2『尊卑分脈』清和源氏系図

源頼朝が伊豆に挙兵して間もなくの治承四年（一一八〇）九月十七日、千葉常胤は下総国府で頼朝に対面し、味方となることを述べ一人の若者を紹介する。それは源義隆の子息「毛利冠者頼隆」であった（『吾妻鏡』）。義隆は、頼朝の父義朝とともに平治の乱に参加するも敗れ、東国へ下る途中で討死している。頼朝もこの合戦に参加しているので、義隆とも旧知の関係で、亡父に最期まで従った人物として尊敬していたのであろう。その忘れ形見である頼隆の容姿をみた頼朝は、これぞまさしく源家の血筋！と感激し、身近に召し使うことにしたという。いわゆる「源家再興の時」に、ふさわしい出会いであったわけだ。

この後、平家を滅ぼし内乱に勝利した頼朝は、文治元年（一一八五）九月三日、亡父義朝の菩提を弔う勝長寿院を建立し、同寺へ義朝の遺骨を埋葬する儀式が行われる。毛利頼隆もこれに参列するが、ここで頼隆は、頼朝とともに同寺の郭内へ入るという特別な厚遇をうけている。同様の待遇は、平賀義信・大内惟義という河内源氏の嫡流の面々だけで、その血筋が重視されてのことであろう。ことに頼隆については、父義隆が義朝の身代わりとして討たれたことが抜擢の理由だという（『吾妻鏡』）。ここには毛利氏に対する頼朝の姿勢がよく表れている。

室町期に成立した系図『尊卑分脈』（図2）は比較的信頼性の高い系図であるが、源義家の七男（六男とも）の義隆に「森冠者陸奥七郎と号す」と注記がある。ここには「森」とあるが、「毛利」のことになる。また平治の乱（一一六〇年）を記した『平治物語』にも、義朝の伯父義高（隆）が、相模の毛利を知行していたことへの言及がある。

しかし具体的にどのような関わりがあったのは不明で、『尊卑分脈』によると頼隆の長男頼胤は「若槻太郎」と信濃国若槻荘を名字の地としていたようだ。次男頼定が「森次郎」を称し、その子孫も「森」を称している。これにより、次男頼定系が森（毛利）を継承したようにも見えるが、他の確実な史料では確認できない。建治元年（一二七五）の六条八幡宮造営注文には、国別に御家人が列挙されており、信濃国の冒頭に「若槻下総前司」「同伊豆前司跡」とみえ、両人は頼胤・頼定兄弟に比定されている。つまり兄弟ともに信濃の御家人と認識されていたことになろう。おそらく毛利荘の支配の実質は早々に失われ、基盤を若槻荘に移したようだ（湯山学「毛利氏」『相模武士4』戎光祥出版、二〇一一年）。

なお森頼定は、三代将軍実朝の家政機関である政所の職員に抜擢され、また摂家将軍頼経の代でも供奉結番衆に選ばれているなど、父頼隆と同様に将軍に重用されている（『吾妻鏡』）。頼定の妻は小鹿島公業の次女薬上であったが、薬上は助局と称し、北条政子とも関係があったようなので、おそらくは幕府の女官であろう（小鹿島文書）。また頼定は暦仁元年（一二三八）頃に伊豆守に補任されているが、それも源家嫡流という血統と、将軍家との親密な関係による特別な処遇と考えられる。

ただし、もとより源頼隆が毛利荘にどのような関わりを持っていたか不明である。それは同じく河内源氏の嫡流にあたる前掲平賀義信・大内惟義も同様で、本領である伊賀国大内郷、信濃国平賀郷を本格的に知行した様子はほとんどみられない。彼ら武家棟梁の家系にあたる人々は、もとより地方の所領を支配することへのこだわりは薄く、京都や鎌倉など政治の中心地を、活動の主とする都市的な武士というのが、基本的スタンスなのであろう。

（2）藤姓毛利氏

源頼朝は平治の乱に敗れ、伊豆で三〇年もの配流生活を送った後、治承四年八月、以仁王の平家追討の令旨に応えて挙兵する。同二十三日には、大庭景親率いる平家軍と石橋山で合戦を遂げるが、その平家軍中に「毛利太郎景行」がみえる。後述するように、和田合戦で討たれた人々の中に「毛利人々」がみえ、これが景行一族とみられるので、頼朝の挙兵にあたっては、平家方についたものの、赦されて御家人となったのであろう。和田合戦に敗れるなどして勢力を失ってゆき、後世にほとんど痕跡を遺していないため、その素性や動向が謎なのがこの毛利氏なのである。

ただし、全く手がかりがないわけではない。毛利景行に関係する資料とされるのが、伊豆山神社（熱海市）に所蔵されている和鏡である（図3）。

図3 伊豆山神社和鏡

この鏡には、次のように刻まれている。

聖人僧永祐
承安二年（一一七二）十一月十一日
藤原景行　芳助平氏
相模下毛利

鏡は伊豆山神社近辺に築かれた経塚から出土したものとされる。経塚とは経典を埋めた塚のことで、末法思想に基づく仏教儀礼の遺跡である。当時、ブッダの教は末法の世に滅びると信じられており、教えを後世に伝えるため、法華経などを書写して地中に埋納したのが経塚である。この鏡は、そうして埋納された経典に添えられた副納品である。

この鏡には相模国下毛利の藤原景行とその芳助、すなわち妻平氏と刻まれている。つまりこの経塚を築き、祈りを捧げたのはこの夫婦であったということになる。下毛利とは毛利荘を上下に分割した一方であるので、藤原景行は下毛利に住んでいたのであり、この景行こそが『吾妻鏡』にみえる毛利景行その人に比定されよう。

景行は「藤原」と称しているが、その素性は定かでない。建保元年（一二一三）五月の和田合戦では、和田方に味方して「毛利の人々」一〇人が討たれており、前述の源姓毛利氏も、後述の大江姓にもそうした情報はないので、この人々は藤原

姓毛利氏なのであろう。『吾妻鏡』の記事は次のようなものである。

一 毛利人々　A毛利太郎　同小太郎　同小次郎
　　森辺五郎　甥一人　彦一人
　　B渋河左衛門　同小次郎
　　同左衛門太郎　同次郎
　　以上十人

波線A「毛利太郎」は、その名乗りと時期から景行に比定される。これにより藤姓毛利氏は大きな打撃をうけたことは間違いない。注意したいのは、毛利の人々の中に渋河氏も含まれていることである。波線B以下四人は渋河を名乗っており、これら渋河氏は毛利氏と深い血縁・姻戚関係にあったので、「毛利人々」に一括記載されているものと思われる。

この渋河（川）氏は『尊卑文脈』（藤原氏乙麿孫工藤）には次のようにみえる（図4）。

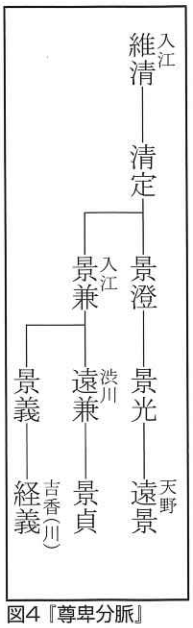

図4『尊卑分脈』

渋川氏の親族は入江・吉香などを名乗っているが、これらの地名は現在の静岡県清水区に集中して存在する。ここは遠州灘の海上交通の要衝である清水港のある地域で、後の南北朝期に活躍する楠木正成なども、この地域の出身であることが明らかにされている。この系図をみると、名前に「景」を多く用いていることに気付くだろう。藤姓毛利氏で実名の判明しているのは「景行」だけであるが、「毛利の人々」とされる渋河氏が「景」を通字としていることは注目すべきことで、おそらく毛利氏もこの工藤系である可能性が考えられるのである。

前掲湯山論文では、源家の家人である「景」を通字とする加藤氏が、愛甲郡司季実と姻戚関係を持つことから、毛利は加藤氏系ではないかとする。もちろん説得力のある説明ではあるが、渋河氏の親族筋とすれば工藤系がふさわしい。ことに天野遠景は、頼朝挙兵以来の側近として重用された武士で、伊豆国田方郡天野（伊豆の国市）を名字の地とする。ここは前述の伊豆山とは一五キロ程の近場にあたり、その一族が信仰の対象とし経塚を築くことはごく自然である。確定はできないが、一案として提起しておきたい。

（3）大江姓毛利氏

大江広元は、もとは京都の官人で、元暦元年（一一八四）ころに鎌倉に下り頼朝の側近となった。諸国守護・地頭の設置を頼朝へ進言するなど、承久の乱後に死去するまで幕府で重きをなした。

その広元が毛利荘を所領としたであろうことは、建久五年（一一九四）八月に、日向薬師に頼朝が参詣した際、下毛利荘で食事を献上したという『吾妻鏡』の記事から理解される。広元の子季光は毛利を名乗っており、毛利荘は季光に譲られている。季光は市内飯山に屋敷を設けていたことは、『法然上人行状絵図』（京都知恩院所蔵・『厚木市史』中世資料編口絵参照）で法然の弟子隆寛をその住所に迎えていることから知られる。

季光は出家して西阿と名乗ったが、熱心な浄土教信者で、嘉禄三年（一二二七）に浄土教の弾圧により奥州へ流罪となった隆寛を、自宅に招いて匿ったのである。季光の宗教心の篤かったことは、その親族の極楽往生を祈って作られた聖徳太子像（重文）などによっても知られる（図5）。

図5 木造聖徳太子立像とその胎内墨書籠字（部分）
埼玉県天洲寺蔵　行田市教育委員会提供

毛利季光は幕府の評定衆に列し、娘を北条時頼の妻に入れるなど、広元の後継者として幕府で重きをなしていたが、宝治合戦で三浦方に味方し討たれる。季光の四男経光は越後に在国していたため、合戦に参加せず生き残り、安芸国吉田荘を安堵され、後の戦国大名毛利氏につながってゆく。

2 大友氏

養和二年（一一八二）五月二十五日、相模国金剛寺の僧侶たちは、頼朝の御所に群参して古庄近藤能成の非法を訴えた（『吾妻鏡』）。郷司であった能成が不当な課税をし、殺生禁断の地を穢しているというもので、頼朝は翌日には僧侶の訴えを認めて能成を誡めている。古庄を領した能成は大友経家の娘を妻とし、能直をもうけている。前述のように、この能直が中原親能の猶子となり、九州

の所領を相続して戦国大名大友氏の祖となる。

訴えた金剛寺は市内飯山の華厳山清浄金剛寺のこととされる。同寺には木造阿弥陀如来坐像（重文）が安置されており、平安時代後期に流行する定朝様の代表作とされる優品で、往事の隆盛が知られる。古庄郷の領域は不詳であるが、飯山の金剛寺と紛争を起こしていることから、飯山を含む下毛利荘内であることは間違いない。

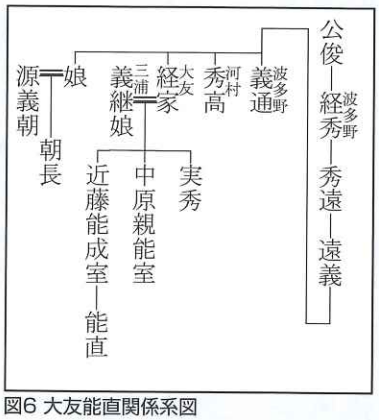

図6 大友能直関係系図

近藤能成が古庄郷を支配したのはなぜか、その点は明確にはし得ないが、《大友能直関係系図》（図6）にみえる人間関係図を眺めていると、ヒントが見えてくるように思う。波多野義通は頼朝の父義朝の有名な家人で、娘を義朝に嫁がせ朝長をもうけると、松田に屋敷を造り住まわせている。大友経家は三浦義継の婿となっているが、義継もまた義朝の家人として大庭御厨乱入事件を起こしている。さらに義継の父為継は源義家に従って後三年の役で活躍するなど、三浦氏は源家譜代の家人の家柄である。

このように大友能直は、河内源氏関係者に囲繞されていた。養子となる中原親能も源頼朝とは特別な関係にあった。幼少時から関東で成長した親能は、京都でも権中納言源雅頼の青侍となるなど行動範囲が広く、挙兵直後から頼朝に味方して京都で活動した、幕府草創の功労者である。また大江広元と兄弟の関係にあることも、おさえておくべき重要な事項である。

源姓毛利氏の説明で言及したように、義朝の叔父義隆が毛利を名乗っており、それは家人筋の近藤氏の郷司などよりも上級の領主権であったと想定される。源家は摂関家など中央権力と連携して、愛甲郡の大部分を占めるような大規模な荘園を設立し、そこに家人を配置していった。その一つが古庄郷司の近藤氏であったのであろうし、また藤姓毛利氏についても、その可能性は考えられるだろう。

鎌倉期に入り、多くの所領が幕府設立の功績として配分され、親能が得た九州の所領は、大友能直を猶子として譲られる。能直は父より古庄郷も譲られたはずであるが、知行した形跡はない。能成の知行地である飯山が、大江姓毛利氏の拠点へと継承されていることからすると、近藤→大江広元という流れが適当で、能直の後見人となった親能が、九州の所領を譲るにあたり、毛利荘内の知行地は、弟の広元へ譲渡するような処置を行ったのではなかろうか。

まとめ

だいぶ憶測も含めた説明となったが、戦国大名毛利氏・大友氏につながる平安末から鎌倉初期にかけての毛利荘をめぐる武士たちの動向を解き明かしてみた。

同荘へは様々な勢力がかかわってくるが、河内源氏がその基軸をなしているようだ。源義家は後三年の役などを通じて東国武士を家人に編成し、また相模武士たちは義家を中核として家人同士の関係を深め、また支配地を拡大していった。まさにそうした動きが毛利荘を舞台として行われ、それはやがて頼朝の挙兵、鎌倉幕府の成立へとつながっていったと評価できよう。

あつぎ郷土博物館が開館しました

平成三十一年一月二十七日、あつぎ郷土博物館が開館しました。「あつぎ」の歴史や文化、自然を紹介して、郷土「あつぎ」への興味や関心をお持ちいただけるようお手伝いをいたします。皆さまのお越しをお待ちしています。

住　所　厚木市下川入一三六六－四
電　話　〇四六－二二五－二五一五
開館時間　午前九時～午後五時
休館日　毎月最終月曜日
（祝日のときは、次の平日）

厚木市史たより　第20号
平成31年3月20日発行
編　集　厚木市教育委員会文化財保護課
発　行　厚木市
住　所　神奈川県厚木市中町三－一七－一七
電　話　〇四六－二二五－二〇六〇
ＦＡＸ　〇四六－二二三－〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。